

生徒の活動を中心にした授業展開の試み

―グループ発表で「こころ」「羅生門」を読む―

小山秀樹

論文構成

- 一 はじめに
- 二 グループ発表までの試み
- 三 グループ発表で「こころ」を読む
- 1 目標
- 2 テキストについて
- 3 授業展開の方法
- 4 授業の実際Ⅰ
- 5 授業の実際Ⅱ
- 6 まとめ
- 四 グループ発表で「羅生門」を読む
- 1 私にとつての芥川の現在
- 2 目標
- 3 授業展開の方法
- 4 授業の実際
- 5 まとめ

五 現在を読むということ（展望にかえて）
六 資料

一 はじめに

私は教職八年目を迎える。今その八年を振り返ってみると、その時その時に出会ったできごと、事件は、常に私の経験を越えており、私はいつも後手後手にまわっていたように感じられる。ある時はそのできごとのもつ重さに気づかず、不十分な対応しかできなかつた。またある時は十分気づいてはいたが、なすすべを知らなかつた。そうして遅れながら少しずつ経験を身につけてきたように思う。

私は新任の頃、生徒が主体的に取り組めるような授業の展開を試みたいと考えていた。しかし生徒の持っている生活は私の経験を越えて重く、最初の三年は、担任としてかわっていくことで精一杯だったように思う。授業の展開の工夫こそ生徒を学校にひきつける武器であることに気づ

かなかつた。次の三年、私は生徒に授業というものを意識させようとした。私の授業こそが受けている授業のなかでいちばんおもしろく、わかりやすいということを（なかなば強制的にでも）定着させようとした。いくつかの試みはうまくいき、いくつかは失敗したが、授業の工夫が生徒を学校にひきつけることになることを確信するようになった。

そして昨年、私は生徒を教壇に立たせる授業の展開を始めた。私は新任の頃の夢にまわり道をしながら再びたどりつき、生徒が主体的に取り組めるような授業の展開をもう一度考え始めようとしたのである。

二 グループ発表までの試み

生徒が主体的に取り組めるような授業の展開として、演習のような形式で授業を進めていけないものかと私は以前より考えていた。高校大学時代、私は意見を友人達と出しあい、相互に批判しあいながら共同で学んでいくことがひとりよりも多くを学ぶことができ、またそのことが未来への勇気につながっていくという経験をしたので、なんとかそのような形式で授業をしたいと考えた。しかし突然に授業で演習を始めるといふわけにもいかず、試行として次のようなことを授業のなかで単発に行なっていた。

I 出席順に数名に対して課題を与え、発表させる。

a 学習内容に関するの研究や感想の発表（現国 古典）

b 学習内容にしたがってテスト問題をやらせ実施し、

解答と解説をさせる。（現国 古典）

c 李徴はなぜ虎になったか、論を発展させる。（現国）

d 全員に対して読みの指導をさせる。（現国 古典）

II 好きな詩人について詩を複数あげさせ、授業をさせる。

I はクラスによって、担当したグループによって良かつたり悪かつたりだったが、授業中に生徒が教壇に立つということを定着させることができた。II については大部分の授業が生徒に好評で、自分たちが授業をすることの楽しさを理解させることができた。

以上のような試みのなかで、私の授業は「何か意表をういてくる。」「何か変わったことをする。」というような感覚を生徒に与えた。したがってグループ発表への移行も生徒は何か期待と不安を持ちながら比較的スムーズに行なえたように思える。

三 グループ発表で「こころ」を読む

1 目標

次の三つを目標として展開を考えていった。

a 共同で「こころ」を読むことによって、自分の読み

が人の読みによって変わることを体験させる。
 b グループで話し合った内容を手順をおって発表できる力をつけさせる。

c 発表と意見交換を通してクラス集団として「こころ」の読みを深め、未来への勇氣とする。

a bをふまえながらcの「未来への勇氣」とする目標をぜひ達成させたいと考えた。

2 テキストについて

「こころ」は上中下の三部構成になっている。教科書（尚学図書）には下の三十五章から四十八章まで載せられているが、何章かの欠落部分がある。そこで授業ではその欠落部分をプリントや文庫本で補充して本文とした。また生徒全員に「こころ」全文を持たせ、読むように指示し、本文以外からの引用や指摘、発表も可能にした。

3 授業展開の方法

まず上中の部分のあらすじと問題点を二つの班に当てて発表させ、全体の流れをつかんで本文に入った。本文を八つの段落に分け、それぞれに問題点を設定させ、考察を加えて発表させていく形で授業を進めた。発表班以外の生徒は感想用紙に疑問や意見を書き、発表班に提出する。発表班はそれを見て、次の時間に補充することになっている。発表班と担当部分は以下のとおりである。

一班（下三十五章に入るまでの問題点と三十五章）二班（三十六年から四十章）三班（四十一章）四班（四十二、四十三章）五班（四十四章）六班（四十五、四十六章）七班（四十七章）八班（四十八章と「こころ」全文）

また、基本的な授業の展開は次のようになった。

学 習 活 動	指導上の留意点
1 前時までの学習経過と本時の予定の説明 2 補充担当班の発表 3 担当班の発表 4 補充担当班、担当班の発表についての助言 5 感想用紙への記入 6 次時の予告	問題点がはつきりと設定されているか。理解を深めるための工夫が資料上、発表の手順上なされているか。 I 発表内容について II 発表の方法について 担当班が感想用紙を利用してみんなの意見をきくことも多い。 次の担当班が次の時間までに考えてきてほしいことなどを言う

4 授業の実際 I ——二一七の場合——

二一七は一班の発表から「問題点」という考え方がよくとらえられていた。たとえば六班の場合、五班から問題となっていた「一般」「例外」「最後の手段」などを自分たちなりにまとめて整理し、「なぜKからの打ち明け話を私は奥さんに伝えなかつたのか。」「なぜ私はKのことを少しも考えていなかったのか。」という二つの問題点を自分たちでつくり、それに対して考察を加えている。また、自分たちで考えた図を毎回のように用いたのもこのクラスの特徴であった。最後の八班では、「なぜKは自殺したのか。」の考察の中で、Kがギリギリの状態から自殺へと進んだその決意の部分に「宗教」の可能性を示し私自身の読みにとっても大きな参考となり得た。

5 授業の実際 II ——二一二の場合——

二一二は「こころ」に対して集団としていちばん深く取り組めたクラスであった。前の班の発表内容をなんとかつがえてやろうという意欲がどの班にもあり、ときには無理とも思える読みで前の班の説を批判していった。聞いている者にとってはどれが正しいのかわからず初めは不安だったようだが、それが逆に自分の読みを持たなければならぬという方向に発展し、クラス集団としての盛り上がりにつながっていた。また、寸劇を取り入れられたり指名を徹底したりなど発表の工夫もこのクラスには見られた。

研究授業を含めて毎回一〜二名の先生方に見学していただきながら発表を進めていったこともいい緊張感を与えたように思う。ここでとりあげる五班の場合、前の班の「覚悟」について私は最初お嬢さんをあきらめると受け取ったが、のちにお嬢さんに対して進むと考えなおした。」という説と「Kの覚悟とはお嬢さんへの告白である。」という説を否定することにより発表を進めていった。また、発表が進み後半の班になつてくると、自分たちの班の範囲を考えるとどこまでも他の班の範囲に立ち入らざるをえなくなるということも起こってきた。その場合は自分たちで前の班の発表を整理検討して論を立てていくようになった。

6 まとめ

すべての発表を終えて振り返ってみると、反省すべき点はいくつかあるように思えるが、いちばん大きな問題点は「評価」についてである。私は授業中の助言でグループに対して発表の評価をしていったが、発表が長びいてしまつて私の話す時間はいつも十分弱程度であった。時間をかけて準備をした発表であったのでそのようになつてしまつたのであるが、聞いている生徒のためにも発表の評価を細かい点にわたつて授業中にしてやればよかつた。また、個人に対しての評価は感想表を中心に行なつたが、評価というには中途半端で、個人のグループに対しての働きかけの評価がでなかつたように思う。

二学期の中間試験後という余裕のない時期であったが、生徒はよくついてきてくれた。盛り上がったクラスは授業とは別に「こころ」の発表を文集にした。冬休みに原稿をまとめ三学期の授業でつくったが、発表の良かった班の原稿はさほど良くなく、発表が今一步だった班の原稿に見るべきものがあつた。最初にあげた目標がどう達成されたかは、今回の経験を書いた生徒の作文から見てもよいと思う。

四 グループ発表で「羅生門」を読む

1 私にとつての芥川の現在

私にとつて芥川はどういう作家であるのか。こう問い始めるのはもちろん、私の中での芥川が次第に小さくなつていつているからにはほかならない。たとえば私が芥川全集などを読み続けていた十代の夏、私は芥川のどこに魅力を感じていたのか。今から思えば気の遠くなるような過去を現在につくりだしてみると、登場人物の持つコンプレクス（複合感情）、あるいは「解釈者」としての彼の存在を私は読んでいたように思う。しかし二十代に入つてその魅力が逆の意味を持ちだしたのは、そう不自然なことではなかつたような気がする。たとえば「藪の中」。さまざまな意味で芥川の本来性がこの作品にはあらわれているように思える。私は現在この作品から「事実の相対性」という観念は受け取れるかもしれないが、ただそれだけである。芥川は

謎を提示はするが、その中を読者が生きるように強いはいない。なぜなら芥川にとつてその謎は十分に可知的だからである。彼は解釈者として、複合感情という観念を謎として書くだけである。しかしそんな彼の作品から私達が受けとれる謎などは何一つなく、ただ彼の自尊心が読みとれるだけなのだ。「トロツコ」の最後の一文の「塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のように、薄暗い藪や坂のある路が、細々と一筋断続している。：」や「蜜柑」の最後の一文の「私はこの時始めて、云いようのない疲労と倦怠とを、そうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅かに忘れる事が出来たのである。」はもちろん作品にとつて不必要だと言えるが、この一文を書いてしまうのが芥川作品なのだ。芥川のみが常にすべての外側に立つて真実とやらを得意げに見通している。しかしそれは人物の心理を透明なものとして見るといふ視点にもとづいているに過ぎない。本当は心理もそのように透明なものではなく、芥川に自分の自意識に対して懷疑を持ち、自分自身の自意識を謎として問い始める態度の変更があれば、彼は「理知主義者」とか「近代人の自意識に苦しんでいた」とかいったようにおとしめられずに済んだかもしれない。

もちろんこれは芥川の問題ではなく、同じ地平にいる私達の問題である。私達は自分が解釈できない他者を認めることができるのか、あるいは不透明な彼方へ自分の自意識を運ぶことが出来るのか…。

「下人の行方は誰も知らない。」芥川はもちろん「誰も知らない」ということを知っているし、その限りでは下人は彼の手の上にいる。私達が現在「羅生門」を読むことの意味は、芥川の意図に反して下人を芥川から解放させること、つまり私達自身と重あわせることによって下人を私達の手に取りもどし、芥川の透명한自意識から私達の生活の不透明な謎の中へ下人を生き始めさせることである。

2 目標

1で述べたように「羅生門」を作品として選んだ以上作品を自分たちの日常と重ねあわせ、下人を自分達の日常に生き始めさせなければならぬ。そこで目標としては「こころ」のところであげたa〜cに加えてd作品を自分たちの日常と重ねあわせ、「羅生門」を体験させる。を達成させたいと考えた。

3 授業展開の方法

大筋においては「こころ」の時と同じであるが、私からの指示は「下人論」「老婆論」「作品論」を約二枚の発表資料にまとめて発表しなさい、だけだった。感想表や補充プリントなどは同じ要領で進めた。ただ「羅生門」の場合は「こころ」に比べて短く、作品自体がグループの盛り上がりを助けることも少ないと考えて発表班に対しては「こころ」の時よりかなり接していった。それはもちろん、「羅

生門」という作品と発表の準備をしていく自分たちとを重ねあわせてほしいと考えたからでもあった。生徒が安直に手にしそうな従来論者の羅生門論を否定していったのは言うまでもない。生徒たちの多くは途方にくれ、私と生徒達との約一カ月半にわたる長いやりとりが始まったわけである。

4 授業の実際

「羅生門」という教材のためか私の指導のためか、今回は班によって取り組みの差が非常に大きかった。ここでは一・Bの七班と八班をあげる。七班は善と悪の視点を自分達で手に入れようとしている。八班は「羅生門」を自分たちの言葉で解釈していく試みである。

今回は発表が進むにつれて考えが発展していくという経過はとれず各班の個性を発表の中で出していくという形になった。たとえばある班の場合「下人は盗人にならなければならぬがなれない。」ことと「自分達は発表をしなればならぬができない。」ことを重ねあわせて発表したりしていた。私の講評はその班がどこまで逃げずに発表に取り組んだかという観点を中心になったので、多少本文からはずれた発表であっても評価をしていった。

5 まとめ

グループ発表の盛り上がり助けられた「こころ」に比

べ、話し合いが全員でできない班が最後まであった。私は生徒たちと常に向きあいながら授業を進めていったが、生徒集団の力を過信していたところがあったかもしれない。しかし話し合いに参加しなかった生徒の多くは私の授業を捨ててしまったのではなく、のちのテスト、レポート等で挽回を期してくれた。それらの生徒は最初からうまくいった班とは違ったことを今回の授業から学んだようである。目標ははたして達成されたか。答案、レポート等から見えていきたいと思う。

五 現在を読むということ（展望にかえて）

このようにして「こころ」と「羅生門」をグループ発表で読み進めて来たわけだが、最初にあげた目標の達成とは別に私とクラスが非常にいい経験をしたという感じが強く持たれる。

「こころ」の場合、私にとつては始めてのグループ発表であったので、一つ一つの生徒の経験が私の経験となつていった。あるグループは発表の前日二人しか残らず私のところに相談に来た。私はきつく「電話で呼び戻せ。」と言いつ、そのグループは夜、話し合う場所を求めて学校を出て行った。（結局誰かの家でしたようである。）またあるグループは全員で私のところへ来て「二つの違う意見があつてまともらない。グループとして発表するというのは二つの意

見を妥協させることか。」と聞いてきた。私は「意見を出して話し合うということは、自分のものでなく、人のものでもない考えにたどりつくことだ。」と、かなり熱っぽく語った。私の話した内容よりその語気に押されたのだろう。彼らは帰つてまた話し合いを始めた。

毎日、現国のクラスでは放課後遅くまで話し合いが行なわれていた。ほおつてはおけないので私はそれらのクラスをまわり、一応その日の決着をつけさせてから帰した。そんな毎日を私は非常に楽しんだし、彼らもこんなに集中して本を読み込んだのは始めてだったろう。

また「羅生門」の場合、最初から困難が予想された出発であつた。芥川を半ば否定しながらその可能性を生徒とともに見つけ出そうとしたのはいさか理想主義過ぎたかもしれない。新しい高校で短篇をほぼ一学期かけて続ける中反発した生徒も多くいたが、まがりなりにも続けることができたのは「こころ」の授業を生徒が私に経験させてくれたからである。その私の力に押され、幾人かの生徒は考えを変えていったし、私はまたその生徒たちから励まされていった。うまくいったグループ、いかなかったグループ、そこでどんな役割もはたした生徒達。自分は逃げたと言つたS君、自己史にも似たものを書いてれたT君、Sさん。君たちと私は「羅生門」という一つの小説をとくに読んでいくことを通して、作者の意図からは離れて自分達の現在を読むことを現在の可能ながかりでしたのではないだ

ろうか。

「こころ」「羅生門」の二つを続けて展開していく中で、私自身の意志から始めたことでありながら多くを生徒達から助けられ、守られて続けてしまっている自分に私は気づくことができた。特に「羅生門」展開の途中、私は前任校を訪れて万葉集のグループ発表をした生徒達の現在の文章を読む機会があつておおいに勇気づけられた。(尼崎さん、大丈夫です 僕はやり続けています。)

考えてみれば、高校、大学、現在に至るまでの職場と私は実に多くの人達から守られて来たのかもしれない。そしてかつて出会い、議論し、守り守られていった人達は必ず現在もさらに困難な状態におかれ、それでもやはり進み続けているに違いない。共同で読むことによつて今までとは違った自分自身をつくり続けていくこと。それでもやはり、私と多くの人々、私と生徒達が出会っていけるのはその地点以外ないように現在の私には思える。

(大阪教育大学教育学部附属高校天王寺校舎教諭)

知1. 「しょとけやく」とは？

「お嬢さんを好きになる前」ではないか？… Kはお嬢さんへ恋を好むようになった。← 変えられない過去の事実。

言いかたは、恋ってなからお嬢さんを好きにはならなから。

つまり… Kは運命を書きながら、昔もふりかえりていっているわけ。その時、「お嬢さんを好きにならなから…」と考えた
と思はる。そもそも自分の道がとれたしたのは、お嬢さんを好きになつたことから始まったのだから。そしてその
自分の道からとれた原因がある、お嬢さんを好きになつたという過去の事実、お嬢さんに出会ったことによつて
来たつてく。たのです。すると、Kは、「お嬢さんに出会うことがなければ、お嬢さんを好きにならず、また自分
自身も自分の道からそれることはなかつたのでは…」と考えたのではないだろうか。

だから… 私たちは「出会う前ならいつでもよかった」という結論を出したんです。

知2. 「あやまれないほどプライドが高い」ということについて…

あやまるまでも、私はKに対して少くも敬意をいたしていたのに、ここであやまる、さらにその物と反感が大きくなる
ので、あやまらなかつたのでは。という意見がありました。… 知る事同様です。

知3. 「Kは私にうらぎられた時に、Kは自分に罪を感じた。」の「罪」とは？

おじさんにうらぎられた私は、おじさんだけを悪人にしたことに対して、私にうらぎられたKは、私をうらんだ
のではなく、私がKをうらむようになってしまったのは、自分が起してしまつた、と考え、自分が悪かつたと思つたのだと
思はる。（お註：「罪」という言葉は不適切だと思はる。「罪」というよりは、「自分が悪い」と考えた。）

知4. 「うらぎられた後の対応の違い」とは？

④ 死、というものを正統とはして見ません。

「Kはうらぎられた時、死んだけれど、私はうらぎられた時から、これまでずっと生きてきた。」という対応です。

《「プリント外の発表」》に関して。

Kの自叙までをよむと…

Kは お嬢さんへ入ってきている自分の道を迷入していることを、先述の以下を見て下さい。

お嬢さんがふくらんで来て、私に告白をする。

↓ 「向上心のない者はほかだ」と私に言われたりする。

「覚悟？」「覚悟—覚悟ならないともない」

↓ 「どうにかしてくれよ…」という気持ちをもち始める。

私とお嬢さんの結婚話を聞く。

↓ お嬢さんへの道はなくなつてしまい、あとに残つたのは、たよりないぼろぼろになった道。

↓ さみしい気持ちとこれから、強き道を道人でいくことへの不安な気持ち。

自叙

Kが自叙をするきっかけとして、宗教女がふくらまれているのでは！？

真宗… 念仏による往生成仏を期する浄土教の一派。

往生：この世を去つて他の世界に生まれかわること。

成仏：煩惱を解脱して仏果を得ること。仏となること。

④ 自叙をするきっかけ… 過去の出来事などが混じつていて、そんなにかんたんに言いあらわせるこ
となんて出来ないうらい大きなことが一番のきっかけだと思はるが、宗教女も含まれてるん
ではないだろうかと思はりました。

資料 話し合い、発表を経験して

発表授業体験

河 尻 尚 子

今までは、先生に教わるだけという感じでしたが、自分たちで考えてみて、まとめ、みんなに自分たちの考えなどを発表して、自分たちの授業が出来たと思います。

普段、深く考え方などを友だちと話し合うことはありません。まして、放課後に残ったりすることもありません。一つのことに向かって協力し合うことも少ないです。その中で、同じことをしつこいくらい話し合つて、その人のいろいろな面が見えたりして、少しいへんなこともありました。したが楽しかったです。

それから、自分なりの考えが出来、人の考えを聞いてその自分の考えが変わったり、付け加えられたりしていくのが、とても愉快でおもしろく感じました。

みんなの前に立ち、教えるというか、自分たちの発表をする、理解してもらおうという難しさも少しわかったように思います。

北 美代子

自分たちで授業をするということは、私にとってもみんなにとっても始めてだったと思います。

放課後に残ったりするのは、クラブをやっている私にとつては、本音を言うときと少しいやでした。でもみんなで集まっ

て意見を出し合っていると、自分と同じ意見を持っている子がいたり、自分と正反対の意見を持っている子がいたりして、だんだんと楽しくなってきました。みんな思つてたより、自分の意見をしっかりと持っているし、人と意見が違ふからといって、自分の考えを引っこめるということもしませんでした。私達は、自分が納得できるまで話し合いをしたりしました。でもやっぱり自分の意見はどうしても、正しいと思つてしまいがちなので、最後の結論に達するまでは大変苦労しました。でも結局私達の班は「覚悟」について、はっきりと結論を出すことができました。とても良い経験になったと思いました。

橋 本 里 奈

私は今まで一つの話しについてこんなに話しあつたことはなかったし、こんなに深く考えたこともなかった。初めの方は、変な授業のしかたするなあと思ひました。いざ自分の班の発表になり、一週間前ぐらいから放課後に残つてみんなで意見の出し合いをしました。いろんな意見ができました。よく似た意見もあつたけど中にはぜんぜん違ふ正反対の意見もあり、一つの言葉にしても人によつて、いろんな取り方があつたのだなあと思ひました。

今までの国語の授業とちがつておもしろかったです。先生が問題をだして生徒が答えるのが普通だと思つてたけど、今度の授業は私達自身で問題をみつつけ答へも考えるので、

うらぶ感感情の六分が感情の五分が情、心を得たうらぶな老妻を、半生うらぶ
恐怖の行打清めていた。正常な感感心まひつていた
特効

うらぶ感感情の五分が感情の四分が情、心を得たうらぶな老妻を、半生うらぶ
恐怖の行打清めていた。正常な感感心まひつていた
特効

老妻を打倒す

判り感感情の五分が感情の四分が情、心を得たうらぶな老妻を、半生うらぶ
恐怖の行打清めていた。正常な感感心まひつていた
特効

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

老妻が、
自分も老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ
老妻より老妻より後生にしろることも出来ぬ

資料「レポートより」

三 具体例！？

私の班はよく話し合った。その中で私は自分の頭で考えられるすべてのことを言った。他人の意見などから、新しい発表もたくさんした。だから、というわけではないが、このレポートで、特に下人の事は、私の班のプリントの意見に自分の意見を付け加えただけなのである。もう、私は、プリント以外に下人の事を考えるのは無理な気がする。今の私の段階では、下人についての新しい発表を自分自身の考えで見つけることはできないのではないか。このレポートを書きながら思った。

それと同時に、私の考えの中に、新しい物が浮かんできた。先生も何度も言っていた、「具体例」である。

この小説の本題はと言うと、先生が嫌いな言い方だが、やはり「人間は、社会によって、価値観などがかわってしまふ。」ということだろう。今まで、こんな大きな事例などないかと思っていた。けれど、羅生門のように、善か悪かという、人間の本質のレベルではなく、もっと小さく考えていくと、それは、今の自分自身ではないかと思えてきた。

私は、公立の中学校から、一般入試でこの高校に入ってきた。学校は、私にとって社会である。全く違う社会に、一人で入ってきたのだ。学校にはその学校なりの世界があ

る。公立は、（先生は、よく知っていると思うけど）みんな、やる気がなくて、自分の考え持ってなくて、けんかもいじめもあって、けれどなんか楽しくて、友達がすごくよくて……。四ヶ月前までは確かにその中で生活していた。

中学校にいる時、国立の高校の雰囲気など、ほとんど想像できなかつた。高校にきて、雰囲気や体で実感してみても、その違いに驚いた。善・悪―よい・わるいの問題ではない。何かが違うのだ。何かというより何もかも違うのだ。私は悩んだ。高校にとけこめていないのが、自分自身で感じられた。また、中学校の時の友人に合うと「何か変わったね。」と言われるのが気になった。自分が変わってしまったので怖かつた。

けれども、そのうち、中学校の時の友人達が変わっていった。私は「高校になって、世界が変われば、その人間が変わってしまったのは当然のことだ」の思うようになった。たとえ今、中学校の三年の時のクラスメートが全員集まっても、中学校の時と同じように生活してみたとしても、きつとどこかが違うだろう。中学校三年生と高校一年生ではやはり違うのだ。

自分が変わっていくのは怖い時もある。自分自身が変わっていくスピードについていけない時もある。けれど、自分がどんな自分になっていっても、それを自分自身だと自覚している間は、流されているのではない。また、社会は、学校だけではなく、グループや個人でもある。たった一人

の人間で変わってしまうこともあるだろう。

私は、ある意味で、これが「羅生門」だと思った。私は今、「羅生門」を通り抜けたのだ。誰でも、人生には幾つもの「羅生門」があるのだ。すぐ通り抜ける門もあるし、なかなか通れない門もある。その門を通らずに、別の道に行くこともあるかもしれない。私は、これからの人生で、門にぶつかるときに、この「羅生門」という小説を思い出さだろう。それが私にとつての「羅生門」という小説なのである。

資料 勇気づけられた文章

無駄について

森 育穂

昭夫みたいな人が、あんまし周りにいないので、よくわからんけど、昭夫のような人は、ある意味では、可哀相な人種だなあと思って。私は、あんまし冴えない人達の仲間だし、この先華々しい成功とかないんだろうけど、一つ言いたいのは、無駄はあくまでも無駄だけど、無駄の中から、無駄じゃないことを見つけようとするのは、無駄じゃないんじゃないかなーということ。能率悪いけど、きつと何か残るものがある。小山先生の授業も始めはめんどうくさくて、難しくて、ヒーヒー言ってたけど、最後には、私のクラスの人々はみんな自分達の課題に一生懸命取り組ん

で、責任もって、補充プリント作ったりしてた。苦勞したかいあって私は、私の課題のことを、自分で掘り下げてみた分、今でもよく憶えているし。そういう楽しみを知らない昭夫人種ってだから可哀相だと思う。もつと可哀相なのは、そういうた楽しみを教えない親をもっていること。昭夫は、その点では幸せだと思う。それから昭夫人種も、私のような人間もみんな含めて、日本の社会に生まれたことが、一番の可哀相だと思う。能力社会に、生まれたことが。

尼崎 三和

私は、この昭夫の考え方に驚いた。昭夫は口に出して「国立大出じゃなければ人間じゃない。」と言ったから、父親が「人間ってものはそういうものじゃない」と正してくれるわけだけでも、昭夫以外にも心の中でそう思っている人は、悲しいけれど今の世の中にはたくさんいるのではないかと思う。そう考えるとなんだか恐ろしい。人間は、色々な人の立場、気持ちを分かっているつもりだけでも、実際にその立場になつてみなければ絶対に分からないことであると思う。だけど人間なんだからその立場に立つたつもりでその人の気持ちに限りなく近づくとということが一番大切だと思った。

この話とは関係がなくなってしまうかもしれないけれど、私は昭夫のような極端な考え方の人間は身の周りにいないし、少ないと思っていた。しかし小山先生の話聞いて私

はなんとなくがっかりし、悲しい気がした。小山先生の「自分達で研究し発表する」という授業は、始めは大変だと思つたけれど、知らず知らずのうちにグループで協力し合つて一生懸命やつていて、発表の時は今までになかった緊張感があり、発表が終わるとすごくうれしくて「万葉集」とかが好きになつていた。そしてみんなからの評価がすごく気になつた。その時本当の勉強つてこういう物のことを言うんじゃないかなあと思った。クラスみんなもあの発表にはけつこう燃えていたと思う。そんなすごい授業を今は高校生の中ではやつていないと聞いて、すごく悔しい気がする。